

New Face

就任のご挨拶

様々な業界から鳥取環境大学に迎えた顔ぶれ。
新しく就任される先生に抱負を語っていただきました。



研究・交流センター
(環境マネジメント学科着任予定)

教授 田中 勝

Tanaka Masaru

ごみ博士と言われる田中です。私たちの生活や産業活動から発生する廃棄物問題を解決して、資源を大切に、環境を大切にする循環型社会の構築について研究しています。

大学時代は広く環境問題を学び、米国に行き、廃棄物の研究をしました。それ以来、ごみ収集輸送、埋立て処分場、焼却施設からのダイオキシン、PCB廃棄物、アスベスト廃棄物、放射性廃棄物など廃棄物のことなら何でも手がけてきました。それでごみ博士といわれるようになりました。

今は環境省の中央環境審議会廃棄物・リサイクル部会長として、廃棄物の3Rの促進や適正処理の確保のために、法や制度の見直しを行っています。

本学では、平成21年度から始まる「環境マネジメント学科」で、「地域活性化コース」と「循環型社会構築コース」を設けており、廃棄物マネジメント分野で活躍できる人材を養成できればと願っています。

日経エコロミーコラム「ごみ対策が地球を救う」を連載しています。<http://econikkeico.jp/column/>



研究・交流センター
(環境マネジメント学科着任予定)

教授 福島 義宏

Fukushima Yoshinori

瀬戸内地方から志戸坂峠や戸倉峠を越えて鳥取県内に入ると、標高の高いところはブナやミズナラなどの広葉樹林が見られ、低地の山腹にはスギやヒノキの人工林が緑のじゅうたんを織り成して、人々の眼を和ませてくれます。また川沿いの落ち着いた家並みは歴史に耐え抜いた重みを感じさせます。一方では、鳥取市の北側の海岸では、全国に知られた鳥取砂丘が望めます。しかし、私には山の緑と広大な砂丘とはなかなか結びつかない風景なのです。と言いますのは、私の初期の仕事が琵琶湖の南部での「はげ山と緑化」だったからです。江戸時代から明治に変わるところ、どうも日本各地の山里は禿山(はげやま)に囲まれていたようです。農家の燃料や家畜の飼料、田畑の有機肥料だけでなく、製塩や砂鉄の製錬で多量の薪を必要としたからです。禿山からは多量の土砂が海岸に運ばれます。前任地で私が関わった「黄河断流」研究は中国の黄土高原から華北平原・渤海への土砂流送と洪水氾濫をどうするかという問題でもあって、実は鳥取砂丘の成因にもつながっています。



研究・交流センター
(環境マネジメント学科着任予定)

教授 三野 徹

Mitsuno Toru

来年度新設される環境マネジメント学科に所属予定の三野です。専門分野は灌漑排水学/水環境工学ですが、現在は農業農村整備全般に関して、工学的、技術学的な視点から事業制度や技術基準等の研究を行っています。京都大学大学院農学研究科を昨年3月に定年退職し、滋賀県立大学の客員教授をしていました。農水省の政策審議会や政策研究会に関わり、昨年から今年にかけて農水省農村振興局に設けられました「農村振興政策推進の基本方向」と「都市と農村の協働の推進」研究会の座長として地域振興に関する報告書の取りまとめをしてまいりました。現在、「耕作放棄地対策」研究会の座長として中間取りまとめをしているところです。わが国の社会構造の変革に対応して、農業農村政策や地域政策はさまざまな転換が図られています。農業農村の活性化や地域振興の視点から、本学を始め、県や関係市町村に少しでもお役に立てればと考えています。なお、昨年から本格的に始まりました「農地・水環境保全向上対策」の全国第3者委員会に関係しており、ソーシャル・キャピタルと地域ガバナンスの形成に大きな関心を持っています。



研究・交流センター
(環境マネジメント学科着任予定)

教授 藤沼 康実

Fujinuma Yasumi

9月1日付けで研究・交流センターに就任した藤沼です。私は長い間、国立環境研究所(つくば市)に勤務してきました。仕事内容はその時々によって変わりました。当初は「公害」を主な研究対象とし、私も大気汚染と植物の関わりについて研究していました。それが、「公害」から「地球環境」へとシフトすると、地球環境を精緻にモニタリングすることに、さらに最近では、地球温暖化を解明する一助として、陸域生態系の炭素収支に関する観測研究に従事してきました。

現在、私たちは、「環境」という言葉を様々な機会に当たり前に使っています。しかし、そのことをもって、環境に対して理解が深まったとは言えません。本学は、わが国で唯一の「環境」を名に冠する大学です。この混沌とした「環境」の実態をクロスワードパズルを解くように、学生の皆さんと一緒に探究してみましょ。そこでは、私の今までの経験が少しは役に立つかもしれません。



情報システム学科

講師 西澤 弘毅

Nishizawa Koki

私は、学問的内容を教育する際の理想形は、学生と教員の対話だと考えています。なぜなら、教員が、その学生の理解のペースに合わせて説明できますし、学生の側は、他の学生に気を遣うことなく教員に質問することができるからです。つまり教員と学生とが密なコミュニケーションをとることができるからです。しかし現実的には、教員が学生一人一人と対話をする時間的余裕はあまりありません。そこで代わりに行われるものが講義である、と私は位置づけています。つまり、講義でも重要なのは教員と学生とが密なコミュニケーションをとるとい原則だということです。そこで講義では、学生一人一人が自分のペースで考える時間をできるだけ作ること、学生が質問しやすい雰囲気をつくることを心がけています。そうすることで、教員は、学生の理解度を把握できることはもちろんですが、心理状態のささいな変化にも気付いてあげられるようになると考えています。これは、精神的なストレスを原因とする不幸な事件や事故を防ぐことにもつながると思っています。



情報システム学科

助教 豊田 寿行

Toyota Toshiyuki

私は、7月1日付けで鳥取環境大学環境情報学部情報システム学科に着任をいたしました豊田寿行と申します。前職は、防衛庁(現、防衛省)航空自衛隊において、航空装備品の研究・開発に従事しておりました。

今まで、勤務地は出身の広島県から東へ移動してまいりましたが、初めて西へ移動して広島に近づくことができ、光栄に思っております。また、鳥取での生活は2回目であり、第2のふるさとに戻って来られたと喜んでおります。

鳥取も昔と変わりました。私も変わりました。世の中ほとんどん変化をしていっていると申し上げて過言ではないでしょう。この不確実で流動性の高い時代にどう対応していくか、また対応できる人材を育成するかがこの時代を生き抜くために重要なことではないでしょうか。そのような人材を育てることこそ大学の高等教育機関である使命である考えます。

社会に貢献できる人材を育成したいという信念をもって教育および研究に従事して、大学の発展および鳥取県の発展に貢献したいと思ひます。よろしくお願ひいたします。



情報システム学科

助教 名古屋 孝幸

Nagoya Takayuki

大学の教員に求められているものは様々であります、中でも最も大切なのは教育であると考えています。常に問題意識を持ち、その問題を解決する能力を持つ、またそのための知識や数学的な基礎を備えているような人材を教育・育成していくことは、大学が社会から求められている重要な役割の一つであると思ひます。学生自身が重要な点を日常的に意識して考え、問題を自分で解決することがいかに大切であるかを、自らの経験にもとづき学生に伝えていきたいと考えています。またそのために、自らの講義を振り返り、講義を良くするためにはどのような努力をすべきか、どのような準備をすべきかを検討するようにしたいと思ひます。

今回、鳥取環境大学の一教員として教育・研究に携わる機会を与えていただくこととなり、その幸運に感謝いたしますとともに、さらなる発展へ向けて微力ながらお手伝いさせていただけるよう努力する所存でございますので、何卒よろしくお願ひ申し上げます。